「人の一生」として総括しているのはおもしろい。付録に二二〇種に及ぶ家印を収録している。

歴史家としての関心は第三部によせられるが、そこでは白山信仰の成立について泰澄伝説を吟味し、加賀国造家の豪族道君との密接な関係を指摘しており、また、一向一揆の時代には、能美郡四組のうち山内組に組織されたこの地域の動きを、加藤藤兵衛なる土豪に焦点を合わせて叙述している。藤兵衛は、十六世紀のはじめこの谷の歴史に現われ、ときに一向一揆と対立し、ときに提携し、さらに柴田勝家の家臣団に組込まれ、また郷代官・大庄屋・役人として生きのび、その間元和年間には耕地の乏しい一帯に灌漑用水路を開鑿するなど、地域の小領主として活動を続けたが、十七世紀後半にいたり、ついに加賀・越前両藩と対立し追放されたのであった。

山村の特殊な農業経営形態に「なぎ」（焼畑）がある。広大な山地への零細な出作りは江戸時代から注目されていたが、最初は奥地への「通い」から、しだいに広い範囲への数年ないし半永久的な「出作り」に転化したものと推定される。村史は、その時期を水田開発の進展と関連させ元和・寛永期とみている。なぎ畑の用益地「むつし」の初見史料は慶長年間であり、その用益権は田畠同様、売買・譲渡・年季作の対象となった。経営の実態についての記述は豊富であきない。

以上、筆者の関心のままに紹介したのは、編集責任者若林喜三郎氏以下多数の専門委員の分担執筆が、それぞれに内容充実していて、容易に要約し難いためであることをおことわりしておく。（昭和三十七年一月刊、白峰村史編集委員会）

（朝尾直弘）

岡山県の歴史

岡山県政九十周年を記念し、併せて第十七回国体に際しての岡山県のＰＲ（？）をかねて、『岡山県の歴史』が刊行されている。岡山大学の藤井駿・谷口澄夫・水野恭一郎三氏を編さん委員に、他に岡山県地方の歴史の研究者二十三氏を協力者として、全約八〇〇頁のなかに、第一章「郷土のあけぼの」から、ひらけゆく古代社会、武士の世、藩政のころ、のびゆく岡山県、そして最後戦後の躍進から、水島工業地帯、瀬戸内海の「夢のかけ橋」、中国縦貫自動車道路への期待といった未来図までを、まことに要領よく、しかもわかりやすく、岡山県の通史がまとめられている。編さんにあたって、「庶民階級の歩んだ道をつぶさに記録し、なるべく県民の生活に結びついたことを中心とする」などの基本方針がたてられた由であるが、章節のたて方も、叙述の方法にも、「中学校卒業程度」の人々にも県史を読ませ、理解させようとする努力がよくゆきとどいているように思われる。政治史の、通史としての流れはむしろ簡単に、代って岡山県の歴史に即した庶民の歴史、農業や漁業や手工業などの産業、村々のくらし、土一揆や百姓一揆の、生活を守るたたかい、そして浄土宗や法華宗や金光教などの庶民の宗教が、より大きなウエートを占めて書かれている。全体年表を含めて八〇〇頁であってみればさまで大冊というわけではないが、その中で中世（武士の世）にあって「鎌倉新仏教のおこり」「地方都市の発達と諸産業」「備前法華のひろまり」、近世（藩政のころ）にあっては「村のくらし」「ひらけゆく新田」「進みゆく産業」「交通と商業」「町人の生活」「民

衆と宗教」などが、それぞれ独立の一節を設けて述べられている。つまり民衆の生活を支える農業以下諸産業の発達の概観と、民衆の魂を支える民衆的宗教の概観が、大きくとりあげられているのであって、本書の大きな特色をなしている。一方各時代の美術についても節を設け、県内所在の美術品について要領よい解説がなされている。そうした叙述はつとめて平易に、そして豊富にルビが付され、また写真も多く、読みやすさ、親しみやすさに心懸けられている。こうして編纂の意図はみごとに結実しているといえよう。近時、いわゆる地方史の編纂はまことにさかんなものがあるが、こうして、読み手を拡大し、より巾広い読者に郷土の歴史を知らせる方法は、地方史編纂者の、常に念頭におくべきことであろう。そうした点で、本書の刊行は、単に岡山県の喜びであるばかりでなく、大きな意義をもつものである。本書は、僅か二ケ年の編さん期間で成ったという。編纂者、協力者各位の造詣の深さはさることながら、月の輪古墳の発掘や『岡山県古文書集』の刊行など、郷土史研究への年期の深さと、加うるに執筆者のチームワークの良さがあってのことと思われる。この成果を十分に生かしてより完全な「岡山県史」を完成されて世に問われんことを期待するのは、私だけではないであろう。

（A5判七七六頁　昭和三七年一〇月　日本文教出版社刊）

（熱田　公）

会報

五月例会

五月十一日（土）午後一時

於　京都大学陳列館第二教室

亜欧の旅　　樋口隆康

（スライド使用）

（要旨は本号学界動向同氏稿「第六回先史学原史学国際会議」参照）

亜欧史観の比較二題　　井上智勇

（発表内容は論文として掲載予定）

六月例会

六月一日（土）午後一時より

臨地講演　鎌倉時代の彫刻　毛利　久

（三十三間堂・京都博物館　見学）

七月例会

七月六日（土）午後一時より

越過の代田法について

米田賢次郎

漢の武帝が匈奴との戦闘の結果生じた、国家財政の窮乏と、人民の不安を除去するために、民力の涵養につとめ、田千秋を富民侯に、